

**入場
無料**

日 時：2015年12月12日(土) 13:00～17:00
会 場：一橋大学一橋講堂 (千代田区一ツ橋)

第3回生存科学シンポジウム

未来への懸け橋

—よく生きるための倫理をひもとく—

プログラム

基調講演 「生命文明における生存科学」

青木 清

「21世紀の科学技術のあり方」

小泉 英明

「環境倫理の過去・未来」

加藤 尚武

「高次脳機能治療は必要？」

浅野 茂隆

「会える別れと会えない別れ～日本人の精神性から考える～」

佐藤 雅彦

お申し込み⇒<http://seizon.umin.jp>

公益財団法人 生存科学研究所

tel: 03-3563-3518 fax: 03-3567-3608

主催：公益財団法人 生存科学研究所 ・ 公益信託 武見記念生存科学研究基金

開催にあたり

今、真偽や善悪が混沌とする膨大な情報社会の中で、未来への不安そして人類の危機を実感している人は少なくないのではないのでしょうか。例えば、現在抱える福島原発爆発やシリア難民の問題等々、さらに21世紀末には気温が3.5度上昇すると予測される地球温暖化の問題もあります。これらは、人間の“生きること survival”のみならず“よく生きること well being”という人間の尊厳に関わる課題なのです。生存科学は21世紀に生きる人類が抱える多くの課題解決を可能にする学問領域だと思います。

日本はGDP世界3位の経済大国でありながら、国連幸福度は46位にすぎません。少子超高齢社会から少子多死となり、家族という社会基盤の崩壊の危機にさらされています。

本シンポジウムでは、「未来へ架ける橋」をテーマに取り上げました。我々日本人に求められているのは、「生存のための哲学から倫理まで」を学び考えることです。生存科学研究所青木清理事長に基調講演をいただき、4人の倫理学の先生からご講演をいただきます。そして「よく生きるための倫理をひもとく」の総合討論を通じて、自らで「自己とは何か、人間と何か、人生と何か、どう生きるべきか」を考えて頂けたら幸いです。

(実行委員長 笠貫宏)

講師ご紹介

青木 清 (あおき きよし) 上智大学名誉教授

生物学者。1972年エール大に留学。1978年上智大教授となり、55年同大生命科学研究所長。神経生物学の立場から動物の本能行動に関する神経機構を研究する。従来からの生命倫理の課題である医療倫理に限らず医療福祉、児童福祉、高齢者問題についても研究の対象としている。

小泉 英明 (こいずみ ひであき) 日立製作所フェロー

「心と脳の科学」という新たな transdisciplinary 分野を提起し、道を拓いた研究者として著名。偏光ゼーマン原子吸光法の創出・実用化による環境計測をはじめ、f-MRI・光トポグラフィーによる脳機能計測技術を通じて脳科学から新・人間学など新しい学術分野の発展に寄与。

浅野 茂隆 (あさの しげたか) 東京大学名誉教授

遺伝子治療研究の第一人者。医師になって最初に受け持った患者が白血病で、その後も白血病患者を診る機会が特に多かった。一生かかっても白血病の患者さんを治せる医師になろうと決意。新しい医療を開発し、臨床の場で試用してその有効性と安全性を確認し、日常医療へ応用していくまでの一連の研究過程の中で企業と大学研究者の利益相反、初期臨床における倫理問題など様々な課題があることを痛感し、生命倫理の教育にも力を注ぐ。

加藤 尚武 (かとう ひさたけ) 哲学者・京都大学名誉教授

東京出身。ヘーゲル研究者であるが、シェリングなどドイツ観念論全般についての著述もある。1979年哲学奨励山崎賞受賞。1980年代に〈バイオエシックス、生命倫理学〉を、日本に導入した。近年は環境倫理について積極的に発言している。

佐藤 雅彦 (さとう まさひこ) 大正大学講師・浄心寺住職

17歳の時、出家、得度。平成17年より文京区本郷通りにある浄心寺の24世住職に就任。ジョージタウン大学ケネディー倫理研究所客員研究員を経て、現在、大正大学で非常勤講師を勤めている。宗教家として現代のいのちの問題に取り組むため「日本生命倫理学会」「日本死の臨床研究会」などで活動している。末期がん患者や死を間近にした人々のベッドサイドを訪問したり、小中学校の子供たちにいのちの大切さを教える「いのちの授業」などを積極的に行っている。